中ロ国境最北の植林事業地、黒龍江省撓力河河畔を尋ねて

(一社) 日中国際交流協会 理事長 長谷川隆淑

3年前より日中緑化交流基金の助成事業を行っている黒龍江省「日中青年撓力河生態緑化モデル林」実施は農墾建三江管理局859農場が担当。8月25~29日の4泊で現地へ行って参りました。

北京〜佳木斯の2時間の空路と陸路自動車で300km移動し現地へ到着、ロシアとの国境に面したウスリー河沿いの植林現場を直接調査いたしました。昨年に植林した杞柳(長さ1m前後の苗木)が植えられている場所(記念碑)確認。その周辺へ足を踏み込むと靴が半分水浸しとなり、今でも充分に土地の乾燥が出来ていないことが判りました。昨年のウスリー河(烏斯里)の氾濫と冠水の被害があることが確認されました。

実施を担当する859農場(開拓農民4万組織)の幹部と、今後の対策を協議し、水が引いた今年の春先と秋口に補植作業を実施し、最終的に95%以上の活性率で事業を完成させるとの言明をお聞きできました。

中ロ国境の黒龍江省は東のウスリー河 と北のアムール河で仕切られ、しばしば水 害を被ります。対岸ロシア領をボートで真 近く遊覧して回りましたが、民家が疎らに 点在する静かな寒村の態で、中国側の賑や かな商業・観光・車両交通と比べ雲泥の大 差が感じられました。



昨今、平成28年12月山口県で開かれる日露平和条約締結に向けた両国首脳会談がホットな課題として喧伝されています。片や、中国僻地の緑化植林助成事業は東北アジアの自然環境(大気)を改善する日中二国間の事業と思い、中国奥地を尋ね歩いていましたが、極東ロシアの一部実情を垣間見ることが出来、様々な事柄がグローバルな関連をもって動いている事に深く感銘した次第をご報告申しあげます。